

40. ^{14}C -トリオクタノイン消化吸収試験

衣笠 勝彦 馬場 忠雄 加嶋 敬
 安芸 宏信 中川 雅夫 日高 硬
 中条 忍 ○細田 四郎
 (京都府立医科大・増田内科)

従来、われわれは脂肪の消化吸収試験として、 ^{131}I -トリオレイン試験や ^{131}I -オレイン酸試験を行って来たが、今回これら長鎖脂肪 (LCT) と消化吸収機序の異なる中鎖脂肪 (MCT) の吸収試験を ^{14}C -トリオクタノインを用いて行った。

基礎的検討としてラットを用い、 ^{14}C -トリオクタノイン胃内投与後の呼気 CO_2 中の放射能および肝・腸・腎・脾・肺・筋・血液の各臓器中の ^{14}C 放射活性を経時的に検討した。いずれの場合でも4時間以後は直線的に減衰し、臓器における ^{14}C の貯留は認められなかった。ついで ^{14}C -トリオクタノイン試験をヒトに実施した。早朝空腹時に ^{14}C -トリオクタノイン $5\mu\text{Ci}$ を経口投与し、24時間にわたり計11回呼気中の CO_2 をフェノールフタレインを指示薬として Hyamine hydroxide に吸収させた。健常例では投与後3時間に最高の比放射能を示したが、消化吸収障害例ではピークは低く遅延した。疾患別に ^{131}I -トリオレイン試験と比較検討すると必ずしも両者は比例しなかった。

結語

① ^{14}C -トリオクタノイン消化吸収試験をラットの基礎的実験と臨床的検討を行い安全かつ比較的簡単に行えることを認めた。

② 消化吸収障害のある患者では比放射能のピークは低くかつ遅延する。

③ ^{131}I -トリオレイン試験と本試験の併用により、吸収不良症候群に属する各疾患の鑑別診断に役立つことが期待される。

41. 当院に於ける48年度肝シンチグラム利用の実態

○藤田 信男 山本 勇治 富井 紘久
 中山 昌彦
 (京都第一赤十字病院・1内)
 道場恵美子
 (同・RI室)

γ カメラを用い金コロイド肝シンチを始めて4年を経過したので、その有用性、問題点を Space occupy lesion (SOL) 発見を中心に検討した。肝シンチ実施の目的別に (I) 肝腫大など第一義的肝病変の診断 (II) 他臓器に発見腫瘍の肝転移の有無 (III) 遷延肝障害(肝硬変など)の検討 (IV) 閉塞性黄疸に関連 (V) その他と分類した。検査1年目(45年)は171症例中 SOL 発見21%, 46年273例中12%, 47年323例中14%, 48年220例中23%であった。48年は症例数が少ないが (I)(III)(V)が減少し (II)(IV)は増加し検査目的の明確化が窺える。48年に於て (I) 40症例中 SOL 発見14例(単発10, 多発4), 最終診断, 肝癌11(原発5, 転移6), 肝膿瘍1, 横隔膜下膿瘍2 (II) 101例中 SOL 発見28例 SOL 否定59例, 判定不能14例で最終診断肝癌31(原発1, 転移30例), 原発巣別では胃結腸癌に肝転移率高く, SOL 否定の結腸癌5例中3例に手術時小転移を認めた事は今後問題を残す。(III)の66例中2例に SOL あり原発性肝癌であった。(IV)は最終診断胆嚢癌3 脾癌3 胆石症6であったが6例に何らかの所見を見た。総数8例原発性肝癌中4例は α -Feto (+) 肝硬変(+) ^{75}Se 取込(+) のヘパトーマであり, 残り4例は α -Feto(-). ^{75}Se 取込(-)の1例は剖見でコランギオーマの混合型であった。尚1例は ^{75}Se 取込(+) であった。肝シンチ時患者を仰臥位に固定し, 正・右側・背面の三方向像を撮るが, 診断に寄与した方向及びその組合せについて検討した。SOL 症例にて三方向像に所見を認めるものは進行病変が多く含まれ, 二方向以下にのみ有所見の場合は一応比較的早期の病変と考えるならば, 我々の症例で2方向以下に有所見例